

旬花報

15号

平成29年3月31日

発行
群馬県立女子大学
同窓会事務局

370-1193 佐波郡玉井町上之手1395-1
TEL: 0270-65-8511
URL: <http://shiou-kai.com/>



同窓会長
野村留美子

同窓会の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私たちの学び舎も変革の時期を迎えようとしています。県立女子大の歩みとこれからの展望について、濱口学長に語っていただきました。

学長あいさつ



学 長
濱口富士雄先生

紫桜会におかれましては、野村会長をはじめとして、同窓の皆様より、新人生への記念品、学生の

課外活動などに対する支援金、卒業時の紫桜賞授与等、常々学生への支援及び本学の教育への理解をいただき感謝いたします。

本学は、一九八〇年の創立以来、いまだに歴史は浅くはありますが、近年、同窓のご息女の入学が見られるようになり、世代を重ねた同窓の誕生ということから着実に伝統が形成されてきたという感慨があります。

本学は人間が営々と築き上げてきたことばや文化、芸術に普遍的な価値を認め、それを基盤とした学びを通しての人材育成を理念とする文学部のみの女子大学として発足しました。発足とともに本学はあたかも俳聖芭蕉が「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」と示した不易流行の理念の如くに歩みま

した。人文系大学として不易の本質を矜持して以て堅持しつつ、社会の趨勢や動向を的確に認識して美学

美術史学科に実技の導入、大学院修士課程の設置、さらにグローバル化という大勢を見据えて国際社会に対応しうる有能な女性の育成を実現すべく国際コミュニケーション学部を増設、英文学科を英米文化学科に改編し、附置機関として外国語教育研究所・群馬学センター・地域日本語教育センター・キャリア支援センターを擁し、新たな進展の契機を得て、人文系大学としての基盤を固めています。

来る二〇一八年度には、群馬県立県民健康科学大学とともに一法人二大学として新たに法人化という変革を迎えますが、人文系女子大学としての本質と教育理念はそのまま維持されます。大学としては、この法人化を好機として捉え、同窓の皆さまにとりまして一段と誇りうる母校となるべく努めてまいります。法人化後には学生への支援のみならず、大学の運営という側面からも同窓の皆さまの力添えが枢要となつてまいりますので、母校への関心をさらに深めていただきたくお願いいたします。改めて、皆さまには同窓としての絆を物心ともに強められ、紫桜会の一層の発展と皆さまの活躍を祈念いたします。

「同窓会カフェ」

今年度も開催しました

同窓会「紫桜会」の活動を広く知ってもらおうという試みとして昨年に続き大学祭で同窓会カフェを開催しました。大学会館二階の同窓会室を開放し、喫茶室としました。飲み物は、コーヒー・紅茶・ハーブディアル三種を準備し、個包装のお菓子とともに無料で提供しました。昨年より卒業生の絵画の展示も行い、来場された方に楽しんでいただきました。



懇親会

盛大に開催

紫桜会という「縁

美学美術史学科

一期生 阿久澤 由紀子

二〇一六年は四年に一度のオリンピックイヤー。

大学の同窓会は、オリンピックの年に懇親会を開催しています。二〇一六懇親会は、十二月三日土曜日、ホテルメトロポリタン高崎にて開催しました。出席者は約八〇名の同窓の皆さん。濱口学長先生のご挨拶、神山先生の乾杯、長沼先生からのお話。すっかり気持ちは女子大生。先生方の講義を昨日のことにように思い出しました。

参会の皆さまとは、同じ大学で学んだという「縁」。大学時代のつながり。同窓生ならではの新たなつながり。先生方や同窓の仲間との「二期一会」のひとつでした。

ちよつと時間が短かったかな。もつと語り合いたかった！でも、「思い切つて出かけてよかった」という笑顔にたくさんお会いできました。

お忙しい日常の中、準備にあたってくださった役員の皆様、お疲れ様でした。皆さんの笑顔が何よりのご褒美ですね。ありがとうございました。次は、二〇二〇年です。東京オリンピックイヤー。また次回も元気に笑顔でお会いしましょう。

* 阿久澤さんには今回の懇親会開催に当たり、多大なご尽力をいただきました。ありがとうございました。

お忙しい日常の中、準備にあたってくださった役員の皆様、お疲れ様でした。皆さんの笑顔が何よりのご褒美ですね。ありがとうございました。次は、二〇二〇年です。東京オリンピックイヤー。また次回も元気に笑顔でお会いしましょう。



左から、阿久澤さん、司会の高橋さん(8期) 役員の堀口さん(9期)



神山先生 ご挨拶



阿久澤さんお手製の 景品をいただきました



景品のミニブーケ、クリアファイルなど

参加者の感想

・ 四年ぶりに懐かしい顔に会うことができて楽しかったです。先生方のお話には感銘を受けました。

・ 初めての方々もみな生き生きしていて元気をもらえました。

・ 昼間の開催だったので、参加しやすかったです。今回初めての参加でしたが、先生方の近況なども聞けてよかったです。

・ 次回は同級生を誘って、また参加したいです。

・ 県女の温かい雰囲気心が和みました。



次も元気で 4年後に！

群馬県立女子大学紫桜会懇親会

懇親会担当のこぼれ話：

今回はおかげさまで過去最高の参加者数があり、大変盛り上がりしました。ご協力ありがとうございました。

一番の反省は、懇親会専門の委員会の立ち上げが叶えられなかったこと。事実上、ほとんどを本部役員が兼任しての準備・開催となりました。告知や運営等、十分な対応ができず、申し訳ありません。

同窓生が増え続ける一方で、本部役員は変わらず、全員がフルタイムの仕事を持ちながら、手弁当(ボランティア)で行なっております。裏方スタッフ大歓迎です。当日のアンケートにもたくさんご意見をいただきましたので、次回は懇親会をプロデュースしてみたいという方、ぜひ紫桜会HPまでご連絡ください。

2016年度 紫桜賞決定!

アロハダンスサークル



アロハダンスサークルは、2009年10月に始動してから約7年になります。前橋市駒形町にあるフラ教室で、毎週月曜日に練習しています。また、毎年さまざまな地域のイベントやフライベントにも参加させていただいています。今年度も「伊香保ハワイアンフェスティバル」や「おたウインターフラフェスティバル」など、たくさんのイベントに参加し、よい経験をさせていただきました。2月に福島県のスパリゾートハワイアンズで行われる全国学生フェスティバルにも参加しました。

中でも今年度は2つの大きな挑戦をしました。

1つ目は、5年前から行われているカレッジフラコンペティションへの出場です。今回で県立女子大の参加は4回目です。ソロの部には3年生の大島彩弓さん、団体の部には部員の中で3年生7人、2年生3人の計10人が出場しました。それぞれオアフ島のハナウマ湾の曲、同じ島のマノア地区の豊かな自然を歌った曲を踊り、結果はソロが準優勝、団体は優勝でした。団体においては、約4か月の中でおおよそ7分の踊りを作り上げていきます。練習では、時に大変なこともありましたが、それを皆で話し合い、励ましあうことで乗り越えることができました。

2つ目は、Ho'i ke (発表会)を開くことです。約2時間の公演で23曲を披露しました。現役生だけでなく、OGの方にも来ていただき、歴代の先輩が踊ったフラもお届けしました。また、今年度からミュージシャンの真木隆寿さんにもご指導いただき、希望する部員でウクレレにも挑戦して、その演奏も発表しました。

(紫桜賞応募書類より抜粋)

近年「群馬県立女子大学はフラダンスの強豪校」として、全国的に有名になっています。



【参考】群馬県立女子大学同窓会表彰基準

第2条 表彰の基準は次のとおりとする。

(1)文化及び学術・スポーツ等...

学術及び芸術及び芸術文化活動の振興に務め、大学の発展に功労顕著な者

(2)社会活動...

社会において活躍し、大学の発展と大学の名の高揚に貢献した者

全国カレッジフラ コンペティション大会実績

2013年度 団体優勝/ソロ優勝

2014年度 団体優勝/ソロ3位

2015年度 団体2位/ソロ2位

2016年度 団体優勝/ソロ2位

初開催のHo'i ke
(発表会)は、大学講堂で。
地域住民の方にも全国
学生ナンバーワンの踊りを
披露し、大好評でした。



Congratulations!

退官される先生より



初期の頃の思い出

文学部国文学科

教授 北川和秀先生

昭和六十年の四月に本学に着任して、いつの間にか三十二年が経過し、この年度年退職を迎えました。ありきたりな言い方になりましたが、この三十二年、長かったような短かったような気がします。その間、国文学科の同僚や学生には大変に恵まれ、とても幸せなことでした。なんとも居心地の良い三十二年間であったと思います。私が着任したのは二期生の卒業と入れ違いでしたので、一期生・二期生の方々は直接の接点はありません。ごく一部の方と同窓会などを通して知り合いになっただけです。

三期生は最初に卒論指導をした学年です。四期生は一番仲が良

かった学年で、当時私が住んでいた教員住宅でクリスマス会をしたり、国語国文学会の懇親会（玉村八幡宮の集会所で開催していました）のあと、わが家で二次会をしたりしました。今、うちは雑然としていて足の踏み場もありませんが、当時は十数人が集まれる空間がありました。わが家の真下には毛塚先生が住んでいらしたので、いろいろとご迷惑をお掛けしたことを思います。

五期生とは部活を通しての交流もありました。私にとって一年先輩という感じの学年でした。六期生は私と同期生です。七期生は、私が始めて入試に関わった学年です。入試問題も作ったし、推薦入試の面接も行い、合否判定にも関わりましたので、そんな思い出があります。この学年は活潑な（イベント好きな）学生が多く、活気がありました。この「旬花報」の題字のデザインは七期生のKさんの手になるものです。

八期生は、国文学科についていえば人数の多い学年です。入試の合否判定に際して歩留まりを読み違えたのですね。でも、人数の多い方が活気も出るし、お互いに刺激し合って、プラスに働いたと思います。新井先生はこの学年で

す。この学年とは、大学祭でゼミ参加をしましたので、それも印象に残っています。

大学祭には、この後、十期生、十二期生ともゼミ参加をしました。大学祭へは、こういったゼミ参加もあってよいのではないかと思います。

○期生といってピンとくるのはこのあたりの学年までです。十五期生なども印象深い学年ですけど、もう十何期とか二十何期、三十何期となると数字では把握できなくなりしました。学生達も自分が何期生か意識はないと思います。

かつては学生との交流も多かったと思います。それが段々希薄になってきたのが残念です。学生も教員も忙しくなったということもありましよう。忙しいのも考えものです。

定年退職をしました。四月からも引き続き非常勤講師として週に一度通っています。

ブログをしております。

<http://mahoroba3.cocolog-nifty.com/>です。よろしければ是非。



訃報

元英文学科教授（平成八年三月定年退官）森山泰夫先生が、平成二十八年九月十一日に逝去されました（享年八十七歳）。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

「二十九年に一度」

昨年の年末、たまたま見た占いにこんなことが書いてありました。

「あなたにとって二十九年に一度の変化の年です。」

二十九年に一度とは、何と壮大な...と思いつつも、二十九年前って何があったのだろう」と振り返ってみると、私が大学に入学した年でした（計算しないでください）。

現在の私。第一子である長女が県外の大学に進学することになり、家を離れることになりました。そして、職場の異動（現時点ではどこに行くことになるやら分かりませんが）。なるほど、大きな変化になりそうです。

これを読んでいる人の中には、二十九年前に社会に出ていた方、大学生だった方、子どもだった方、生まれていなかった方といういろいろでしょう。大学にもいろいろな変化がありました。同窓会役員となり、大学の変化をつぶさに見ることでできたのは、得がたい経験だったと思います。これからの大学の変化も、見守って行きたいと思